

## P9-333

### 看護専門学校 BSCの取り組みと課題

諏訪赤十字看護専門学校

○山岸 節子、登内 秀子、引地 文子、小栗 ひろみ、  
山田 みどり、北澤 忠、伊藤 睦美、林 容子、  
林 純子、石橋 絵美

平成18年当校は一転して学校存続が決定した。存続決定に伴い、あらためて学校の現状を見直し、課題を整理し、今後の学校運営の方策を模索した。学校を取り巻く環境を再確認し、また現状を客観的に見直す必要があった。設置主体の病院はBSCを取り入れており、学校もその一部門としては取り組んでいた。しかし学校独自の課題を整理する方策としてもBSCが活かさないか検討し、挑戦ではあったが、学校独自のBSCに踏み切った。平成18年9月、「学校をとりまく環境」を一覧にし、当校の強み・弱み・機会・脅威を教師全員で明らかにしこれからの看護教育の方向を見据え、ミッションを学校の理念、教育目的として位置づけ、ビジョンとして中長期目標をあげた。経営課題を4つの視点に配置し、戦略目標、戦略マップを作成した。戦略マップは、文献で紹介されているような単純なものではなく、独自の方法でBSCとしてまとめた。この検討段階を教職員全員で取り組んだ。その結果、教職員全員が中長期的にみてどこへ向かっていくのか、1年間で何を目標にするか根拠が明らかとなった。またその方策もアクションプランとして示されており、担当者を決め、それぞれが実施することにした。アクションプランは今までに実践してきたものも含まれていたが、その意義や評価の時期が明確になったことから進めやすくなった。しかし一方では、顧客の視点が学生や保護者の視点になっていないという指摘や目標値として何をどう表現するか分からないことも出てきた。平成18年から平成20年までの学校のBSCを振り返り、今後の方向を検討。その経過を報告する。

## P9-335

### 患者参加型の看護計画に基づいた看護実践への取り組み

岡山赤十字病院

○三宅 尚美、牧原 百合子、玄馬 康子

【動機及び方法】現在、患者と目標や看護計画を共有し、同じ目標に向かってともに問題解決を目指す「患者参加型の看護実践」が求められている。当院では、平成15年より患者・家族の要望を聴取し、要望や意見を取り入れた看護計画を立案し、患者・家族に説明、同意を得て実施している。平成17年より毎年看護記録のオーディット調査を実施しているが、平均94.4%で患者・家族の要望を取り入れた看護計画の立案ができていた。平成20年度は、患者参加型の看護実践の実施を看護部の目標とし、記録委員会でも1部署4事例以上の実践事例報告を目標値として取り組んだ。初めての試みとして、看護師全体での情報共有と意見交換を目的に記録委員主催による「看護実践事例発表会」を開催した。その試みを評価する目的で、参加者にアンケート調査を行った。

【結果】参加者77名中、回収数73名、回収率94.8%であった。発表会については100%が「有意義であった」と回答した。感想では、1「患者参加型の看護計画について発表を聞いて方向性が見えた」等患者参加型の看護計画についての理解が深まったが8例。2「他病棟の看護の取り組みや努力しているところを知り参考になった」等他部署の取り組みや意見が参考になったが36例。3「他部署がどのようなカンファレンスを行っているのかを知り参考になった」等カンファレンスの持ち方などが参考になったが9例。4「日頃の自分の看護と照らし合わせて考えさせられた」等自分の看護を振り返ることができたが7例。5「看護って素晴らしいなと改めて思った」等その他の回答をしたのが17例であった。以上の結果より事例発表会は有効であり、今後も継続する必要があることが示唆された。

## P9-334

### 精神科病棟におけるグループミーティング導入後1年目のスタッフの変化

諏訪赤十字病院

○小松 智子、五味 己寿枝

2004年9月に公表された「精神保健福祉の改革ビジョン」において精神障害者の総合的な地域生活支援の充実に向け、今後10年間の具体的な方針が示された。そのような中で、A総合病院精神科病棟において、退院支援の一貫として2008年6月よりグループミーティングが開始された。このグループミーティングは、患者の希望によって自由参加であり、テーマは特に決めず、語り合う場である。看護師がリーダーを行い、看護師と臨床心理士がサブリーダーとなり、第2・4木曜日の14時からの40分間を定期的実施されている。これまでの平均患者参加数は3名/1回、平均スタッフ参加数は4名/1回である。研究者は、グループミーティング参加体験から、患者の見方・場の雰囲気を感じ方が変化した経験がある。一方で、参加しない看護師との関係で罪悪感や疎外感を感じた経験もある。そこで、グループミーティング立ち上げと運営に関わった看護師・臨床心理士が、その過程において、どのような変化を体験したのかを、参加者の語りから明らかにすることを目的に研究をおこなった。研究デザインとして、半構面面接法を用いた質的記述的研究とした。倫理的配慮として、研究実施にあたり、参加者には口頭で研究目的、研究参加の自由意思、プライバシーの保護について説明し、同意を得た。今回、グループミーティングについて、導入後1年間のスタッフの変化に焦点をあてて考察し、この結果から、グループミーティングのスタッフにとっての影響と意義および今後の課題について検討したので報告する。

## P9-336

### 清潔ケアの変化に伴う看護師の満足感

名古屋第一赤十字病院 神経内科病棟

○三宅 美帆、太田 祐理、坂口 真奈美、川北 洋子、  
山田 美穂

【はじめに】神経内科はセルフケア不足の患者が多く、日常生活のほとんどに介助を要するため、看護師の業務時間の多くを清潔ケアに費やしていた。しかし新棟に移転し病棟にシャワーが設置され、週1回はシャワー浴を行うことが可能になった。そのことにより、患者の満足そうな表情がみられ、看護師の清潔ケアに対する意識の変化が生じてきたと感じた。そこでアンケートを実施し、看護師の清潔ケアに対する満足感を調査した。【目的】清潔ケアに対する看護師の満足感を把握する。

【研究方法】研究期間 2009年6月1日～6月7日研究方法 神経内科病棟勤務の看護師19名にアンケート調査を実施する

【結果】以前の清潔ケアは全員がなんらかの負担を感じていたが、ケアに対する達成感は78%だった。以前に比べて現在の清潔ケアに73%が満足しており、以前のケアよりも患者が清潔になったと感じる人も76%いた。しかし満足していないとするスタッフも26%いた。

【考察】結果より、現在の清潔ケアが変化して、患者の全身がきれいになったと感じるスタッフが多い。満足していないスタッフからは手足の汚れが気になり、部分浴が必要であるという意見があった。そのためシャワー浴だけではなく、個別性に応じて部分浴を取り入れていく必要がある。部分浴を取り入れ、患者がよりきれいになったと感じれば看護師の満足感もより満たされるのではないかと考えられる。

【おわりに】現在の清潔ケアでは不十分と考えている人もいるため、今後はその点を改善し、より看護師の満足感が得られるように検討していく。